



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	青年期の自己形成と教育実践の現代的課題：高校生の自主活動：北海道高校生の広場の事例を通じて
Author(s)	井上, 大樹; Hiroki INOUE
Citation	社会教育研究, 19, 45-56
Issue Date	2000-12-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28532
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P45-56.pdf



青年期の自己形成と教育実践の現代的課題

—— 高校生の自主活動：北海道高校生の広場の事例を通じて ——

井上大樹

はじめに

20世紀の最後の年は、バスジャックをはじめとする高校生年代が起こすあらゆるショッキングな事件が世間をにぎわすこととなった。これに象徴されるように、現代の青少年が抱えるあらゆる困難はとりわけ1990年代に入ってより深刻になったといつてよいのではないだろうか。近代以降、ライフサイクルとして確立された青年期では、自己探究をすすめ、人間性の開花をめざすとともに、自他の人間性の開花を可能にする社会とは何かを問うていけるという⁽¹⁾、人間にこれまでにない創造的な発展の新しい可能性が与えられたはずであった。しかし日本においては、20世紀の最後の4半世紀に青年期（青年らしさ）そのものの存在が危ぶまれていったといわれる。先述の事件を現代の青少年の生きづらさの象徴ととらえる識見も出されている。表面的には「青年らしさ」のかけらも見られない彼らが持つ、生きる上での本質的な問いや要求、それに応える教育実践を見いだすことはそう容易ではないであろう。しかし、90年代にも薬害エイズ問題の取り組みや阪神大震災などのボランティアに自主的かつ協同して活発に社会参加をしている青年の存在を忘れてはならない。また、少数ではあるが高校においても生徒会による自治活動のみならずさまざまな形態をとって自主活動が多様に発展していることも事実なのである。

私の当面の研究課題は、自主活動における高校生の自己形成を検証することから、青年期の人格形成を保障する教育的課題を明らかにすることである。これまでに、高校生の抱える課題の分析および自主活動の90年代の傾向や事例検討を通じて、学校、地域（Community）、社会（Society）を貫く青年期教育に対する高校生の自主活動、北海道高校生の広場の取り組みが持つ意義を明らかにし⁽²⁾、青年期には不可欠な「自己形成」という要素にこだわりながら、青年期教育の課題と今後の実践への展望を概観することを試みる。

序 青年期は消滅するのか

生徒の年代から思春期の後半であり、青年期の始めに位置づけられる高校教育は、思春期における人格の再統合問題に直面している十代のアイデンティティを確立するのに応えるものがふさわしい⁽³⁾。日本では、高校進学率が90%台で推移しその後は進学と就職に分かれることから、高校

は学校生活から社会生活のゆるやかな分岐点になっていると言えよう。すなわち、高校教育を経て、大人になるより具体的な見通しをつけるのである。特に社会や文化に対するアイデンティティを確立させることが青年期の人格形成に不可欠であろう。

ところが、現実にはいじめ、不登校、高校中退、問題行動が依然頻発し、90年代に入り授業不成立、学級崩壊と事態はむしろ深刻化している。さらに、近年では「学びからの逃避」という、学校の機能や根幹をゆるがす問題も指摘されている⁽⁴⁾。それは、早期に勉強が「できる」「できない」層に2分化される中で⁽⁵⁾、家庭学習時間も同様に分化され「できない」層の勉強や生きる意欲をそいでいき、さらに学力差が拡大していく。また、双方の層で（受験知を得るだけの）勉強と自分たちの求める「学び」の乖離が一向に取まらない中で、「できる」層にも同様の現象が起き「分数のできない大学生」までも生まれている。とりわけ、高校では受験制度などにより学校間格差が増大し生徒が階層別同質集団に組織され、底辺校に教育困難が集中している。中堅、底辺校では部活加入率の低下など「管理」の手法でも校内の指導の限界を感じる教員も少なくない。さらに、生活の社会化が進み家庭生活そのものが市場によって支配されている。現在、中学生の子どもを抱える親が共通一次世代に入り、競争教育による学校的価値観が家庭（親）へ浸染しきっている。さらに、新学力観導入以降強化された中学校までにおける人格（忠誠・よい子）競争が拍車をかける形となっている。

このことから、現在の青年期は、自己形成どころか自我の維持すら非常に困難な学校、家庭、社会に取り囲まれていると言えるのではないか。

さらにここ数年急速に進む高卒就職難、改善が進まない大学卒の就職難から、「子ども（学校）から大人（雇用）へ」移行過程としての戦後的青年期枠組みが社会制度としても消失されかかっていること⁽⁶⁾が指摘されている。

このような状況で今の高校生はこのまま青年期および青年期に必要な教育の機会を消失されることになるのか。ここでは、これについて高校生の生の声から検証を試みたい。私は、北海道内の中学生、高校生の学校、家庭、社会などに対する本音の議論を教師や親などの大人を交えて展開する企画を1998年から断続的に開いてきた。一連の取り組みから明らかになった中高生の本音の柱は以下の3点である⁽⁷⁾。

- (1) おしつけはいや（もっと自由にしてほしい）
- (2) わかるように教えて
- (3) ルールは一緒に決めて一緒に守ろう

また「北海道高校生アンケート」の自由記述のまとめでは、高校生が求める理想の高校として以下の5つの条件を提起している⁽⁸⁾。

- ・楽しくて、自分の好きなことに打ち込め、充実した学校生活を送れる学校。
- ・教師・校則がうるさく（厳しく）なく、生徒を人間として認めてくれる学校。
- ・「いじめ」がなく、生徒どうしが仲がよく、行事などで燃えられる学校。
- ・授業がわかりやすく、好きなことが学べて、自分の将来に役立つ学校。
- ・自分自身の「生き方」が見いだせ、人間的に成長できる学校。

以上から高校生たちが学習、生活を通して自己形成をしたいという要求を自覚的に持っていると言えるのではないか。すなわち、自己形成への要求が普段の生活から、学校、地域、社会へと貫徹される中で彼らは「一人前の大人」へと育っていくのではないだろうか（図1）。さすれば、要求と現状の矛盾が集中した青年期にどのような教育実践（克服）の契機があるのか検討する必然性が含まれていると言えよう。

1 青年期教育の理論的課題

このような青年期の困難について、竹内常一の青年論、生活指導論、学習論がとりわけ高校教育全般について重要な示唆を与え続けている。とりわけ「市民（Citizenship）教育としての普通教育」により具体的全体性を回復することを強調している。

竹内によると現代の子どもたちは、マイクロポリティックス（子ども社会の自然状態）の中で暴力的に生きることの術を身につけてしまう。いじめ、迫害のみならず相手の領域に極力立ち入らないようにするやさしさごっこを経、自己の孤立化、無力化、（権力に対する）降伏、透明化がすすむ。このことが、自他の人格的統一性への不信（他人→自分、自己の意志→自己の身体の暴力的支配）を増幅させていると言う。これに対して、他者との和解を通じて平和的な関係をつくり人格主体を

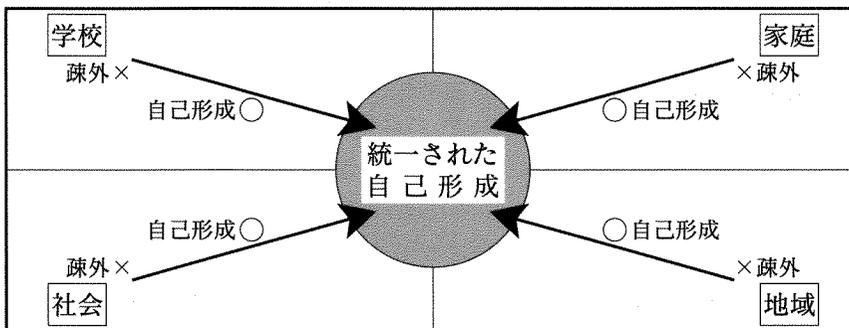


図1 学校、家庭、地域、社会における青年の疎外から教育実践の発展による自己形成のふかまりのイメージ

形成する教育実践を展望している⁽⁹⁾。

一方、竹内は日本の学校状況を二つの極をもつ2つの流れから説明している(図2)。現在では、政策側は一元的な能力主義から多元的な能力主義(新学力観, 多様化など)に軸が移行しているといえよう。これに対する戦後民主教育の対抗軸にも、ユネスコ, 子どもの権利条約に根拠をもつ人権と民主主義に立つ教育への移行が求められているという。これは、「制度的な知」+「権力的な知」のなりふりかまわぬ強制的注入に対し「実生活と教育の結合」(教材の生活化, 自主編成)を継承, 発展させることである。すなわち, 新学力観による一定の枠内への「主体的学び方学習」に対しては「参加と学習」「批判的学び方学習」を, 「制度的な知」「権力的な知」に対しては対話・討論のなかで働く知を得る学習ということである。これらを経て, 一人ひとりの発達にそくした具体的全体性へ開いていくことを課題とした「学びと参加」の学校につくりかえるというのである。「学びと参加」の学校における「授業」は, (ヨコ並びの) 教師と子どもとが教材を介して, 生きるに値する世界を拓いていくものとして構想されている⁽¹⁰⁾。

しかしながら, これには「実生活と教育の結合」を現代的に迫及するのに授業からの学校改革でとどまってよいか? という疑問を持たざるを得ない。青年期に主体的な市民としての力量を彼らの生活実感から引き出していくというのであるならなおさらである。むしろ, 学校の枠を乗り越えて社会, 地域の中で自らの権利を内実化, 機能させる(妥当性をもって合意形成される)ような教育実践の必要性こそ強調されるべきだと私は考える。

一方, 子どもの社会教育(学校外教育)における増山均の理論はこれらの提起を社会教育から引き取ったものといえよう。しかし, 増山は学校外における地域子ども集団の形成を実践として構想していた。増山が注目する子ども劇場・親子劇場の取り組みでは, 地域の子どもの親・青年の自治, 協同とネットワークは形成されたものの, 教師は意図的に含まれなかった。これは「学校くささ」の排除には功を奏したといえるが, 学校外で活躍する子どもたちの学校における居場所の確保にはつながらず, 「学校くささ」の中で彼らはむしろ矛盾や孤立観を深めるのではなかろうか。すなわち,

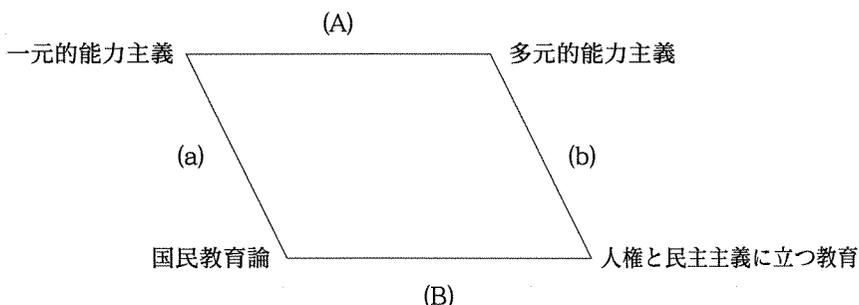


図2 日本の学校をめぐる四極構造(竹内常一)

子どもや青年の民主的な集団づくりや居場所づくりは、学校外でつくるものと学校改革につながるものの意識を統一することなくして彼らが安心して成長できる場にはならないということである⁽¹¹⁾。

これに対し、竹内が一時期提唱し展開しきれなかった「地域生活指導論」というのがある。竹内によると、そもそも学校における生活指導は地域生活指導運動として誕生したという。社会の発展は生活の社会化（公共・民間）・共同化をすすめ家庭生活そのものが社会的な営みになりつつある。しかし、現代の生活の社会化（公的部門の縮小）・商品化（民間部門の拡大）の進行は、地域住民、子どもたちの文化的支配を人格の中心まで向ける。すなわち、国家や企業などが住民の体制内化するための支配としての生活指導の媒体としてより大きな機能をもってくる。これに対し、教師のみならず地域で働く様々な専門職・団体、住民が民主的な生活の社会化・共同化をともにすすめ、地域の共同生活主体、自治主体として高まっていくことが求められる。そのために、（生活の社会化がもっとも進化した形態としての）学校における生活指導実践の応用が求められているというのである⁽¹²⁾。

また、森田俊男の地域に根ざす教育論では大人の地域づくり、学校づくりにより子どもの発達環境が保障されるとされ、教師、親、住民の共同により地域に人を育てる働きを取り戻すとされている。しかし、この共同の輪には子どもたちは入らずに発達環境が保障される（保護される）側に位置づいている⁽¹³⁾。

学校などの現在の生活世界、これから生活するであろう地域、社会で自分はどのように生きていくか。この問いに対して、家族、学校、社会、自分、同世代に対する疑問、矛盾から紐を解いていくような学びが現在の青年の、とりわけ高校生の年代の自己形成に不可欠ではないだろうか。そのためには、青年期の自己形成を保障するような教育実践を学校、地域、社会を貫いて構想されるべきではないだろうか。とりわけ、世代の自治（生徒どうしの仲間づくり）、地域の課題を学ぶ、地域の大人とのつながりをつくる実践が現在の青年期に欠けているといえるのではないか。現代の高校生への教育実践として「有機的教養学習」、すなわち自らの生きる課題と家族、学校、社会の課題を協同して解決しようと学ぶ中で統一されることが必要であろう。

2 現代の自主活動の傾向とその意義⁽¹⁴⁾

最近の高校生による自主活動の主な事例でいえば、京都の桂高校の制服導入反対、所沢高校の卒業式・入学式の自主編成、平和ゼミナール（高知幡多ゼミナールなど）、愛知の私学助成運動と私学フェスティバルなどがあげられる。これだけでも、実に多様な形態が生みだされているといえよう。近年の高校生による自主活動の特徴をまとめると、学校参加でも地域の大人たちとの協同（親、住

民)や社会に対するアピールを含んでいること、有志の集まり(実行委員会)が周りの生徒を巻き込み一つの学校の枠を超えた幅広さを持っていることがあげられる。近年では、神奈川の私立旭丘高校が自分たちの校舎移転問題とそれにかかわる鎌倉城址整備計画を、学校近くの商店など住民へのアンケートなどを通じ、学びながら自分たちの学校の存続にかかわる課題と地域の課題を統一するとともに、自分たちの「学校を残したい」要求と地域住民の要求を整備計画の見直しという形で行政に反映させている。

これらの自主活動に取り組む高校生たちは、一見無関心に見える多くの高校生たちと同じように「(大人たちの)おしつけはいやだ」「学校を楽しくしたい」などという思いを持っている。また、98年春に校長による卒業式、入学式の日丸・君が代強行導入に反対した所沢高校生は各地の集会で参加者に「学校をどうしたら楽しくしていけるかを考え、大人にはそういう環境をつくってほしい。」というメッセージを送り続けている。

現在の高校生の自主活動について森田らの分析枠組みがある。これによると学校内の実践では、生徒会などの学校参加と文化祭、部活などによる学習・文化創造活動、学校外では社会参加と地域、社会における学習・文化創造活動という4つの枠組みを持ち出している(森田)。とくに学校外の自主活動においては、地域で学校の枠を超えて継続的な学習・調査・創造活動を行い、年1,2回の集会をひらく。これらの取り組みを財政に至るまで生徒の自治で行っていることが注目されるという。これは69年の文部省見解(高校生の政治活動の禁止)の創造的克服であるとともに、96年中教審答申「学校外活動の充実」(「生きる力」と「豊かな心」の形成)を市民としての諸力量の形成として具現化していると評価している(森田)。

しかし、これらの枠組みは学校内と学校外を分けることで旧来の枠組みを横断するような有志の取り組みがもりあがるという近年の傾向を捉えずらいものにさせている。これは、学校が偏差値輪切りの中で同質集団に、管理教育や生徒どうしの同調圧力が強くなっているなか、教師すら感じている校内の実践の限界を克服している点で強調されるべき点である。また、子どもの権利条約の理解について大人や主体者の側が「子どもを子どもとして処遇し、かつその見解を大切にすること」で民主主義における子どもの人格の発達を保障する(森田)と述べているが、市民として大人と同じように対等のパートナーとしてともに地域、社会をつくるという視点が欠けていると言えよう。先述より、高校生の自主活動は学校横断型や地域社会参加に傾倒し、学習・文化創造活動との複合も目立つ。このことは、校外活動と校内活動との往還が一つの取り組みの枠をこえて起り、生徒の自己形成が学校や家庭、地域(学校外)を貫く可能性を持っているといえよう。

これらから考えられる現在の高校生による自主活動の意義は次の通りである。

・高校生自身が同調、競争的価値観からの(学校、資本が支配するサブカルチャー双方から)

解放される。

- ・地域や自分の（身の）回りの集団が学習（文化）創造集団に組織される際、個々の異質性が水平に評価されあう中で自己の価値観を形成する。
- ・教養・学習を自ら組織し、（生徒同士、生徒と教師、生徒と住民など）協同して実践するなかで、学校における教育実践のみならず自主活動そのものも再構成され、高校生の自己実現の領域を拡大する。

3 北海道高校生の広場

北海道の高校生による自主活動の主な取り組みとして、「北海道高校生の広場」（以下「広場」）がある¹⁵⁾。「広場」は北海道の高校生が学校の枠を超えて自分たちで夏、秋に学校や社会のあらゆる問題や文化活動を素材に企画を立案、運営している。毎年、夏の「広場」（以下「夏」）として8月に2泊3日のキャンプ、秋の「広場」（以下「秋」）として教職員組合などによる北海道合同教育研究集会（合同教研）の中で高校生の集いを開催している。「夏」では、高校生が希望する「学び」を学校の授業の枠を大きく超えて企画されている。「秋」では、さまざまなテーマにあわせて討論や体験する「分散会」が企画の軸である。概ね各集いの参加者は主に道内の公立高校から100名～200名である。

一方、企画・運営する実行委員は道央地区（札幌市内、小樽市内、空知管内など）を中心に10～20名前後である。実行委員会は原則月1回だが、企画前は随時行われる。会合には必要に応じてOBOGが関わっているが、顧問の高校教員はほとんどが出席せず討議にはほとんど加わっていない。取り組みの内容が変わるほとんどの転機は生徒からの発信である。例えば、1992年から始まる「夏」はキャンプ形式にすることから生徒提案であった。また、1997年の「夏」では、1日目の夜（雨天、校内泊）の教師の対応をめぐる生徒側が団体交渉を申し入れ、夜の過ごし方の決まりを「集い委員会」を組織し自分たちでつくり参加者自治を進展させている。その結果、この時に「北海道高校生宣言」がつくられた。

「広場」は子ども権利条約の批准運動の高まりなどを受け、北海道高校教職員組合（以下、道高教組）が1991年7月に自主活動検討委員会を設置したことに始まる。自主活動検討委員会では、この年の合同教研に「広場」を開催することを提唱し、準備会に集まった高校生によって企画・運営を任せることとした。この呼びかけに至るには、自主活動検討委員であり「広場」の顧問団長である川原氏（奈井江商業→札幌東商業）らが各教育研究集会で知った取り組みによるところが大きい。90年代初め、愛知高校生フェスティバルや高知幡多ゼミナールなどひとつの学校の枠を超えて活動する高校生の自主活動が大きな盛り上がりを見せていた。これらの取り組みでは、校内では目立た

ない、困難を抱えていた生徒がいきいきとし、教員の想像を超えた力を発揮していた。このことは、これまでのホームルーム活動や生徒会活動における生活指導実践に行き詰まりを感じていた彼らに新たな展望をもたらした。

「広場」は取り組みの変遷から大きく4つの時期に分けられる(表1)。

第1期(91「秋」～94「夏」):子供の権利条約と「理想の学校」づくり

これは、言い換えると子どもの権利条約の批准運動に軸をおいて展開されたといえる。企画としては先生が教えたい、生徒が学びたい授業を展開する、子どもの権利条約(意見表明権、教育への権利など)をテーマとした寸劇をグループで作ることなどに具体化された。この時期は教師提案が目だったといわれる一方、生徒の自治の力量が伸びた時期でもあった。92「夏」では実行委員生徒の試行錯誤が続き、1日日夜遅くまで実委で議論することで「自分たちで作っている」実感を得て92「秋」も引き続き実行委員として活躍している。93「秋」では、教師や大人にも自分たちの意見をぶつけたいという要求に応え開催された「バトルディスカッション」では、大人たちが生徒からの鋭い意見に正面から受け止められなかったもの高校生と大人が対等に意見を表明し、意見表明権の保障とは何か教師と始めとする大人たちに問題提起したという点で興味深い。

第2期(94「秋」～):文化・学習活動の活性化

「全員で何か大きなことに取り組んで、みんなで感動を味わいたい」という要求から生まれたビックアートは、現在では「秋」のメインイベントとして定着しつつある。また、「秋」の分散会や「夏」の企画には、「討論や話し合いよりはみんなでものをづくりあげることがしたい」という要求が高まり、よさこいや郷土芸能などさまざまな文化・学習活動がこのころから取り組まれるようになる。

第3期(96「夏」～98「夏」):高校生どうしの「つながり」を見つめ直すとともに、地域との協同が進む

校内における生徒会役員と会員との関係の問題にあらわれるように、「広場」でもこのころには「参加者は見るだけのお客さんなのか」という疑問が実行委員に対して噴出した。

95「秋」に参加した十勝地区の高校生が96「夏」の実行委員として関わるなかで「もう、参加したくない」と本部(札幌、空知地区)の実行委員にくっつくかかるといふ事態がおきた。ここで、「一人ひとりみんなが主役の夢の学校づくり」の再確認をするとともに、企画にも交流からつながりづくりへ、実委と参加者の垣根を取り払うことが意識され始めた。まじめな討論だけでなく自分たちで参加して何かやる企画として「メールBOX」が「秋」で設置された。

96「夏」から地域住民の協力を仰ぎ熱気球体験などを実現させている。97「夏」には、講師として参加した地域住民の方が「(今の高校生は)ちゃんと聞いてくれるのか」という不安が、熱中し習

表1 「高校生の広場」の取り組みの変遷

時期	年,月	企画名	内容など
	1990.11	北空知高校生大座談会	(学校の問題について)奈井江高校の新聞部長の生徒を軸に、北空知地区の高校生を集めた。参加した生徒たちから「校内ではそんな話ができない」という感想があった。
	1991.1	高校生バトルマッチin札幌	札幌、空知地区の2、30人で闘論会。北星余市高校生の中途編入体験を聞きながら、生徒、教師入り交じっての議論となった。
	1991.7		自主活動検討委員会の設置を盛り込んだ北海道高教組運動方針が採択される

*以下「広場」の内容については「会場/参加数/実行委員構成/主な企画・特徴/備考」の順に記載

第1期 子ども権利と夢の学校づくり	1991.11	秋の広場91	札幌南高/29校82名/空知、札幌地区/分科会でテーマ別討論を自分たちですずめる/理想の学校づくりへの提起
	1992.8	高校生サマースクール92	砂川子どもの国&オアシス館/10校32名教師16名/理想の授業づくり、クラス毎の自治活動(1班10人担任つき、自炊と演劇づくり)、愛知高校生フェスティバル報告
	1992.11	秋の広場92	北星新札幌高、札幌清田高/約100名/札幌・空知地区/前夜祭(演劇、バンド)2日目(分科会)
	1993.8	サマースクール93	砂川
	1993.11	秋の広場93	札幌/160名//教育や学校をめぐる議論「バトルディスカッション」
第2期文化・学習活動	1994.8	サマースクール94	///出し物(寸劇)のテーマを「子どもの権利条約」に設定/第12条意見表明権、第13条表現の自由、第28条教育への権利から学校の抑圧体制無理解な教師、無関心な高校生に対する告発
	1994.11	94秋の広場	///ピクアート/合同教研の閉会集会でアピール
	1995.4		「渡り川」上映会(帯広)をきっかけに、十勝高校生サークル(7月のとちか非核・平和フェスティバルに参加)
	1995.5	春の集い	札幌/「高校生の広場規約」「バトルディスカッション-いじめ-」/「いじめなくそう宣言」を全道の高校の生徒会へ発信する。
	1995.5		函館地区高校生の広場:終戦・被爆50周年平和への旅立ち-ピースキッズ95-平和を考える高校生・青年の集い
	1995.8	サマースクール95	砂川/80名教師10名
	1995.11	95秋の広場	登別・室蘭地区高校生の広場:手作りでフランス、中国核実験反対の署名運動
第3期 高校生のつながり & 地域との協同	1996.3		札幌・空知地区以外の顧問団の拡充を狙い、高教組自主活動交流集会を十勝地区で開く。
	1996.8	96夏の集い	上士幌/120名教師30名/実行委員会と十勝高校生サークルの共同/「熱気球に乗って見ないか?」ある教師の提案から、地域(町商工観光課、教育委員会、商工会)との相互協力(キャンプ場、テント貸出、気球)で参加者全員が熱気球体験できた。
	1996.11	96秋の広場	40校160名/空知、札幌、小樽/分散交流会(ダンス、演劇、平和フリー交流:男女交際、映画、趣味)。「メールBOX」の設置。/実委の代替わりが進む。交流からつながりづくりへ。
	1997.8	97夏の集い	余市/200名教師50名/2日目青空セミナー(和太鼓、阿波踊り、よさこい、余市の史蹟めぐり、中国人強制連行跡のフィールドワーク)、成果発表会、3日目いかにだたり/役場、教育委員会から農道空港を借用する。青年会議所の協力を得る。小樽高等養護学校(4名)、雨竜高等養護学校(3名)の参加。「北海道高校生宣言」がつくられた。
	1997.11	97秋の広場	札幌月寒/200名/「高校生文化フェスティバル」/学校で個性をほとんど出さない子が教科通信の裏ですったピラを見て夏の集いから参加し、援助交際がテーマの演劇を脚本・演出・主役までやる(マスコミの反響)。文化活動が各学校に広まる。
	1998.8	98夏の集い	砂川オアシスパーク///ヨット、カヌー、カート体験、連風あげ、「どんなときも」を手話で合唱/自治体と連携し支援を強化。商工会青年部の協力。
第4期	1998.11	98秋の広場	札幌新川/100名
	1999.8	99夏の集い	砂川/40名教師ほか20名//2日目青空セミナー(よさこい)、成果発表会、3日目連風あげ
	1999.11		夢の学校づくり実行委員会結成(釧路)
	1999.11	99秋の広場	北星新札幌/100名教師ほか15名
	2000.1		全道高校生生徒会交流会(札幌)
2000.8	夢の学校 ~2000夏~	白糠町/釧路の高校生「夢の学校づくり実行委員会」	

*第4期:「広場」と学校の実践の往還,統一

得する高校生の姿で吹拭され驚きを感じ、高校生の新たな一面を発見した。この彼らの文化への積極的な挑戦が成果発表会で披露されるとさらに地元の方々の感動を呼んだ。98「夏」の地域関係者の「高校生のいきいきした姿、今では見る機会がない。」という感想からは学校に抱え込まれた高校生の実際の姿が地域住民にはなかなか見えないことを示した。

また、97「夏」から聾学校生が参加している。最初はびっくりしていた高校生も障害の有無を超えて一緒に活動し、最後の感想発表を集中して聞いていた。さらに98「夏」では、手話で「どんなときも」とみんなで唄い「みんなで一体になれた感じがうれしかった」（聾学校生）と障害の有無を超えた交流がさらに進展した。

第4期（98「秋」～）：「広場」と学校の実践の往還、統一がすすむ

このころから、これまでの道内公立校私立高校の生徒の参加が増える。「広場」で得られたことが普段の学校生活に反映し、校内のユニークな取り組みを「広場」の企画にして学校間の交流が深まった。美唄の高校の文化祭でクラス対抗よさこいソーランコンテストを企画した生徒会執行部がよさこいを参加者に教えた。また、札幌の商業高校では当初は所属する女子サッカー同好会の合宿もかねて「夏」に参加した生徒らが、「秋」に自らがつくるバンドの演奏をし、校内でも軽音部に対する偏見を乗り越えて自分たちの活動場所を確保するために先生たちに訴えるようになった。さらに、「秋」の分散会ではこのところふるわなかった平和と生徒会交流の分科会が参加校数、人数ともに増え、「広場」以外に分散会独自で活動機会を増やすなどして盛り上がりを見せている。

「広場」の取り組みの到達を示したものとして、97「夏」につくられた「北海道高校生宣言」がある。この「宣言」からは、「広場」で学校の枠を超えた交流や地域とのつながりをつくり、自治の実践、文化づくりを通じて出会い、経験を保障された「学びの共同体」がつくりあげられることが示されている。また、「広場」に関わった高校生、教師が「ひろば」的機能の魅力を実感している。「ひろば」的機能とは、居場所、たまり場、「交流」を経て学校文化や資本文化から独自に文化を形成していることである。

第4期から、生徒が「広場」で学んだことや得られた自信を自分の学校の中で発揮しようとし、またその逆の動きも多少なりとも見られる。一方、第3期から始まった地域との協同は1回限りのものであり、地域における有機的な（生活）課題学習のあり方を模索している段階といえよう。また、新しい実行委員、顧問の養成は「広場」の大きな課題である。近年、実行委員は1～2校で10人以下にまで減少し、それまでの企画の立案、運営が困難な状況にまで陥った。原因としてはこの取り組みが全道の各高校に浸透しきれていないこともあげられるが、「広場」へ生徒を組織したり参加を強力に呼びかけたりする主力顧問が少人数に固定されてしまったことが大きいであろう。

顧問団長の川原氏（札幌東商教員）は地域の青年たちと演劇の自主公演づくりに取り組んだ経験

が「広場」立ち上げ時の企画の基本構想に活かされ、現在では学校（高校）教育、社会教育の枠を超えた青年期の自主活動実践を構想して「広場」に関わっている。「夏」の開催地の住民を講師として組織するなど「広場」の顧問の活動が社会教育職員の仕事と類似することなどから、自主活動実践やその支援の方向性が社会教育実践および社会教育労働から展望できる可能性もあると言える。

4 まとめと今後の検討課題

これらのことから、学校・社会参加活動において真の対抗文化が形成される地域の有機的教養学習を通じてこそ青年期の自己形成が可能であると言えよう。また高校生の自分くずしと自分づくりの基盤は学校を含めた彼らの生活世界という意味の地域であるということも言えよう。

今後、この仮説を深めるにあたり「広場」に参加した生徒たちの反応などから検証をすすめるとともに次のような検討課題があげられるであろう。ひとつは、90年代自主活動の代表的事例（愛知・私学フェス、神奈川・私立旭丘高、所沢高など）により、実践によって築かれた生徒独自の集団（社会）、文化の形成過程と生徒の成長（自己形成）過程との関連を検証することである。もうひとつは、全国や北海道における（90年代・道高教組自主活動検討委発足後）自主活動とそれにもとづく高校教育実践の議論の整理、検討である。その中で、実践の中から学校、地域、社会を貫く高校生の自己形成の内実をより鮮明にし、高校生の自主活動など青年期教育の理論を提起したい。

注

- (1) 竹内常一 現代青年論 高校生活指導 第52号 1980
- (2) 拙論 高校生による自主活動による青年期教育の現代的課題 日本社会教育学会第24回東北・北海道集会自由報告 2000
- (3) 竹内常一 現代青年論 高校生活指導 第52号 1980
- (4) 佐藤学らの指摘による。
- (5) 現在では小学5年生がその分岐点であるという説が強い。
- (6) 乾彰夫 「戦後青年期」の解体 教育 No.650 2000
- (7) 拙著 学校、親、社会、そして自分の生き方に向けて 民教 No.108 1999
- (8) 北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 北海道高教組情報号外 全員討議資料6（高校生白書——北海道高校生アンケートから——） 1998
- (9) 竹内常一 少年期不在 1998、竹内常一 子どもの自分くずし、その後 1998、竹内常一 生活指導 新教育学事典 第4巻 1989 など
- (10) 竹内常一 高校教育改革の構図 講座高校教育改革 1 1995、竹内常一 学習を問い直す 教育 No.574 1994、竹内常一 日本の学校のゆくえ 1993 など

- (11) 増山均 子ども組織の教育学 1986, 増山均 子ども研究と社会教育 1986, 増山均 教育と福祉のための子ども観 1997 など
- (12) 竹内常一 全生研第27回基調提案 地域と学校をつらぬく生活指導の原則を明らかにしよう 生活指導 No.344 1985, 竹内常一 地域生活指導運動とはなにか 全生研常任委員会編 地域のなかの生活指導 1988。この考え方は子育て・文化協同運動や生活指導学会に浸透しているといわれている。
- (13) 地域——人格形成にとっての意義 森田俊男論集 第2巻 地域の理論 序章 1976, 地域にねざす国民教育——方法的構想 森田俊男論集 第4巻 地域にねざす国民教育 序章 1976
- (14) 日高教・高校教育研究委員会ほか 高校生の自主活動と学校参加 1998
- (15) 「高校生の広場」の取り組みについては以下の資料および顧問団長の川原茂雄氏(奈井江商業高→札幌東商業高教員)への聞き取りをもとにまとめた。
北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 北海道高教組情報号外 全員討議資料1 (高校生の「自主活動」) 1993
北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 北海道高教組情報号外 全員討議資料2 (高校生の「自主活動」) 1994
北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 北海道高教組情報号外 全員討議資料4 (生徒会白書) 1996
北海道高等学校教職員組合自主活動検討委員会編 北海道高教組情報号外 全員討議資料5 (「子どもの権利条約」と高校生の自主活動) 1997